

2 1時間の授業の中での評価との取り組み

1時間ごとの授業を大切に扱う教師の態度は大切だが、毎時間具体的な評価と取り組む授業はなかなかできるものではない。実際に記録をとって子どもを追究するのは、各担任が1～2のことに内容をしばって、子どもの変容をとらえようと努めている。

次に挙げる例は、小学部高学年で「量（かさ）を意識する子の育成」をめざす実践である。学習は、生活の中で、掃除バケツの水の分量、コップの飲み水の量を適量に処理できるようにすることをねらって、具体物の操作をくり返し、それをことばと結びつけて表現させようとした。

下表は、1時間毎の子どもの指導目標を的確におさえるため実施した評価表である。どの教師も同じ方法で授業と取り組んでいる。

児童名	前時の実態	個人目標	評価	次時目標
○子	かさは容器で高さのかわることに気づきだした。	容器が変わっても、かさは変わらないことに気づく。	→	
○夫	かさを高さでくらべようとする。	具体操作をくり返す中で容器をかえてもかさの変わらないことに気づく。	→	

前時の実態から個人目標を設定して、指導を焦点化するわけであるが、前項で述べたように、知識・技能にかかわるものが多い。また、毎時間変化が見られるとは限らないので、何日も同じことが続く場合もある。しかし、このように個人目標を的確におさえて指導にあたることは、教師の授業との取り組み、手だてを反省する機会も多くなり、指導法の改善にもつながってくる。

この授業では、水による比較 → 色水による比較 → ジュース・カルピスによる比較と、単純な操作活動を水の変化で興味・関心を支え、「多い」「少ない」・「いっぱい」「すこし」をことばとかかわって表現するよう14時間にわたって反復学習している。現在、7名中4名がかさとことばの対応が可能である。

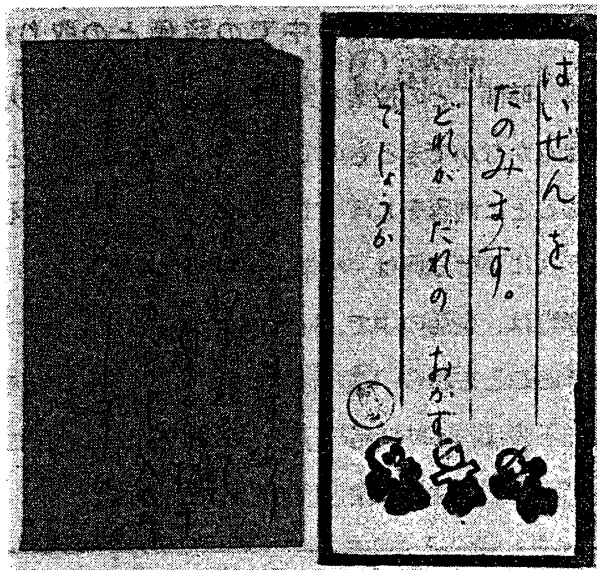
子どもの態度化にかかわる評価は、単元を通して子どもの変容とかかわる場合が多い。知識・技能にかかわる場合もそうだが、単元はひとつのくぎりと考えらるべきであろう。

3 単元を通しての評価との取り組み

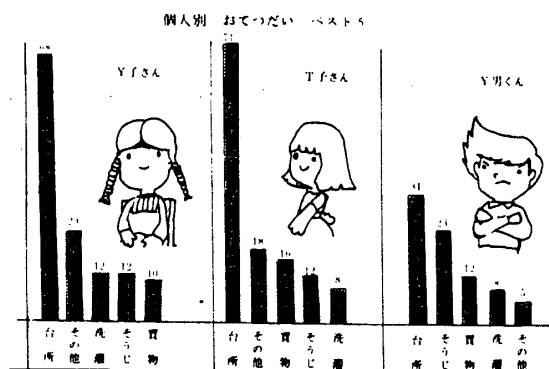
表現する力が生活の中で、「生きて働く力」として育つには、学習したことが、ことばや動作や作品となって現われてこなければならぬ。これが態度化してきたということで、長い目で子どもを見守ってこそはじめてわかることである。次に挙げる例は、中学部1年の3名の生徒が、

「母の日」を前に、お母さんの仕事を考えることから出発した、お手伝いの定着過程である。

お母さんの仕事の中から、自分たちのできるお手伝いを考えて、「母の日」を中心にした学習を、保護者の協力を得て、お手伝いカードによる家庭学習に発展させた。右の写真は、カードの一枚を紹介したものだが、表にお手伝いの内容、裏にその時の状況を記録してもらって、教室の表にグラフとして掲示していった。その後、学校での学習（例えば、宿泊学習の調理など）が、手伝いという形で家庭の中で取り組まれるようになった。一枚



のお手伝いカードが、子どもたちの家庭生活での定着の状況を示すものではないが、その積み重ねの中で、子どもの態度化の様相を見通すことができるのである。お手伝いカードのような取り組みでは、評価との取り組みがやりっぱなしにならないようにしないと、保護者も教師も大へんな労力をかけて、効果の薄いものになってしまう。5月～7月のまとめの中で、担任として取り組んだ盛山・田口は、「いかに現実度が高くても、学校での取り組みはごっこです」「家庭の一員として役に立ったよろこびを育てられたお母さんの力はすごい」と、学校の立場、保護者の立場を説き、「確かな足跡が残ったはず」と評価している。



お手伝いカードを通した家庭学習への発展は、子どもに対する関心が強く、最初の「させられた手伝い」から、「進んでする手伝い」が多くなってきている。保護者の関心協力はさらに強く、9月～12月のまとめの中で、盛山・田口は、「子どもにやらせて、心苦しい親の気持」が伝わってくるとかいている。

このような家庭学習は、教師と保護者が一人ひとりバラバラでかかわるより、学級の問題、保護者共通の問題として取り上げる方法がある。お手伝いカードによる学習の生活場面への発展は、さらに3学期へと続くことになっている。

4 学期末の評価

1時間の評価、単元を通した評価は、子どもの学習過程での状況把握のための評価であり、同時に、教師が子どものために準備する授業の改善のための評価である。